

〈王昭君〉説話の受容と展開

— 平安朝物語を中心に —

文化創造研究科国文学領域

一四〇〇三CJM 高橋 舞

修士論文要旨

和蕃公主として匈奴へ嫁いだ王昭君の存在は、中国において様々な潤色が施された。その中で確立した〈王昭君〉像は次の通りである。

- ① 和親政策の中で匈奴に嫁いだ後宮の女性（『漢書』）
- ② 匈奴では二夫に見え、一男二女を産んでいる（『漢書』『後漢書』）
- ③ 後宮内では元帝に見えることができなかった（『琴操』『西京雜記』『世説新語』）
- ④ 元帝の寵愛を受けられなかった昭君はそのことに怨みを抱いていた（『琴操』『後漢書』）

- ⑤ 昭君が元帝の寵愛を受けられなかったのは、皇帝が後宮を杜撰に回っていたからである（『琴操』『白氏文集』）

この王昭君の物語は日本にも伝来し、漢詩や和歌といった様々な作品で詠われるようになった。それらの作品において独自の設定として

描かれた〈王昭君〉像は次の通りだ。

- ① 皇帝の寵愛をうける〈王昭君〉（『うつほ物語』『源氏物語』）
- ② 美しい肖像画によって匈奴に選ばれた〈王昭君〉（『うつほ物語』）

※その他日本の作品では肖像画は醜く描かれている

- ③ 匈奴へいった後の皇帝の恋慕（『源氏物語』『今昔物語集』『俊頼髓脳』）
- ④ 賄賂を贈らなかった昭君への非難（『和漢朗詠集』『今昔物語集』）
- ⑤ 後宮にいる他の宮女たちの教唆によって醜く描かれる肖像画（『唐物語』）
- ⑥ 人の心の曇りを知らなかった〈王昭君〉（『唐物語』）

以上のように、日本における王昭君像には、皇帝の寵愛など中国でみた王昭君像とは異なる新たな要素も確認された。